

天才じゃないキミへ

キミは天才になりたかったんだね 過去の天才たちを見て思う
その後が続くのは自分だと キミにはその可能性があったね

天才たちの後を追った でも差はなかなか埋まらない
キミは焦りを感じた いつまでも若くはない

悩んでもいい 迷ってもいい それでもボクはキミを見てる
天才にはないその個性で 天才にだって勝てるさ
いつか来るその日を楽しみにしてるよ

キミはその手に握った小さな夢を 道具だと言って苦笑いした
「ホントの自分はいこうじゃないんだ これは自分の望んだものじゃない」

でもその手を開いてごらん その小さな夢は輝いて
キミの人生そのものじゃないか キミだってわかってるんだ

あきらめきれず くやしい思い 胸の奥に隠してる
不器用なその 必死な姿 なんだかさキミらしくて
ボクも一緒にほらくやしくなるんだ

いつかキミの力が尽きて 夢に幕を閉じたとき
ボクはありがとうと言うだろう キミをたたえて歌うだろう
キミが悩んで苦しんだぶん 精一杯キミに届くように

でも

瞳の奥にある輝きは まだ消えてないはずだよ ねえ